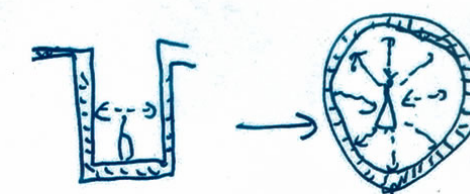


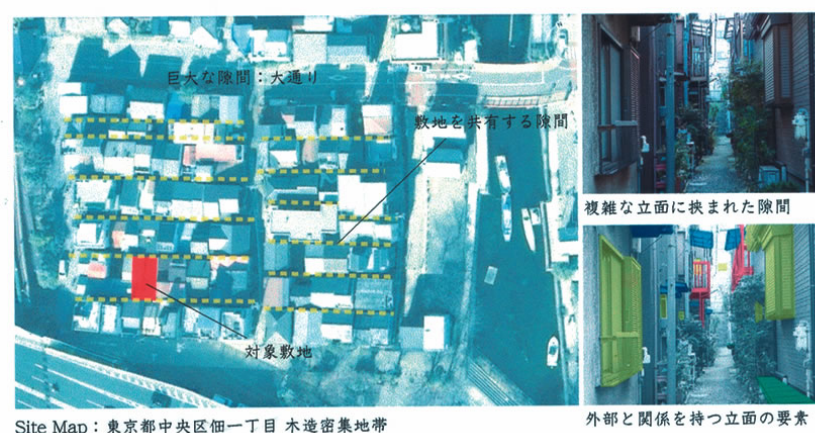
わたしの隙間を囲って

「呼吸する家」とは立面という建築の表皮を通して、生活の息吹を吐き出し、 囲との様々な関係性を取り込んでいく建築だと感じた。しかし、老朽化した木造密集地帯における住宅は狭小な共有の隙間に対して けられる立面が硬く閉ざされ、人々の居場所とはかけ離れた呼吸しない存在となってしまう。そういった共有の隙間に対して無関係なモノに挟まれるのではなく、様々な関係性によって囲まれるような「わたしの隙間」をもつ家を提案する。隙間が自分の所有物として都市に在ることによって、生活に付随した様々な豊かさを持った関係性が都市に張り巡らされた隙間のネットワークを介して街中に広がっていったとき、その街固有の息づかいが聞こえてくる。



Concept: 無関係なモノに挟まれるのではなく、様々な関係性によって囲まれる「わたしの隙間」

Site/Context: 呼吸しない立面を持った隙間の街

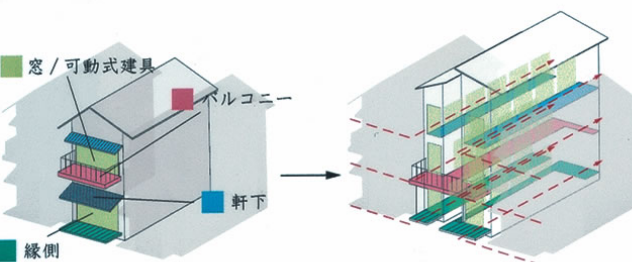


Site Map: 東京都中央区佃一丁目 木造密集地帯

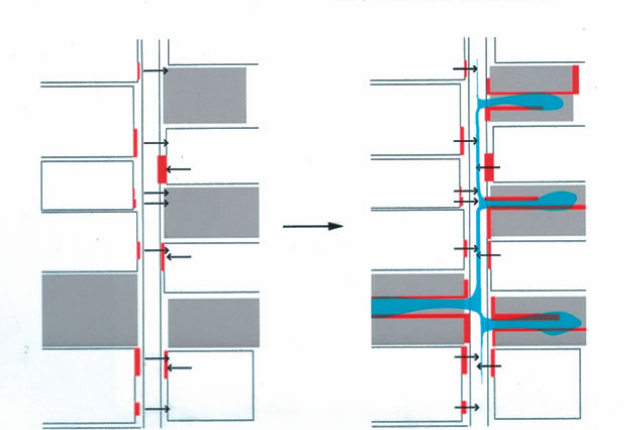
外部と関係を持つ立面の要素

対象とする地域は東京都中央区佃一丁目地区。この場所は古からの木造密集地であり、複雑に り組んだ隙間のネットワークが住人たちの生活動 として残っている。しかしその隙間に対して縁側、バルコニー、軒下、窓といった本来日本建築が伝統的に外部との関係を持ち得る立面の構成要素がただの装 としての役割しか果たしておらず、そこに建築としての「呼吸」は存在していないように感じる。

Diagram-1/Floor Plan: 立面を内側に取り込む

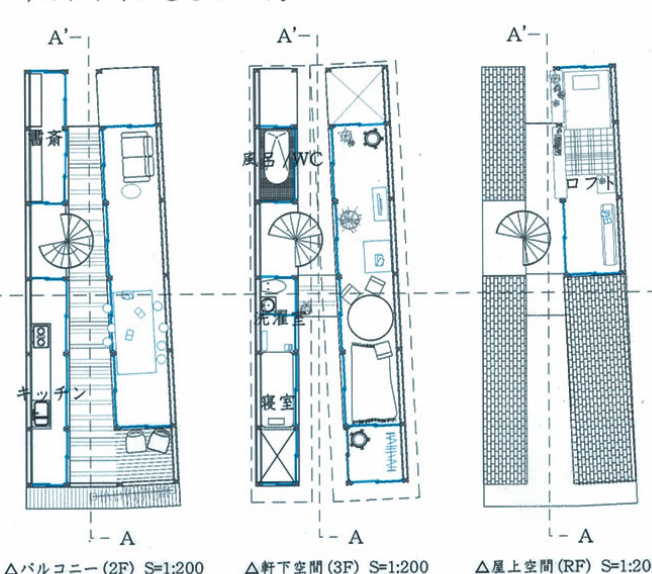


1) 複数のエレメントによって構成される立面



1) 都市の隙間に溢れる様々な立面を構成する要素

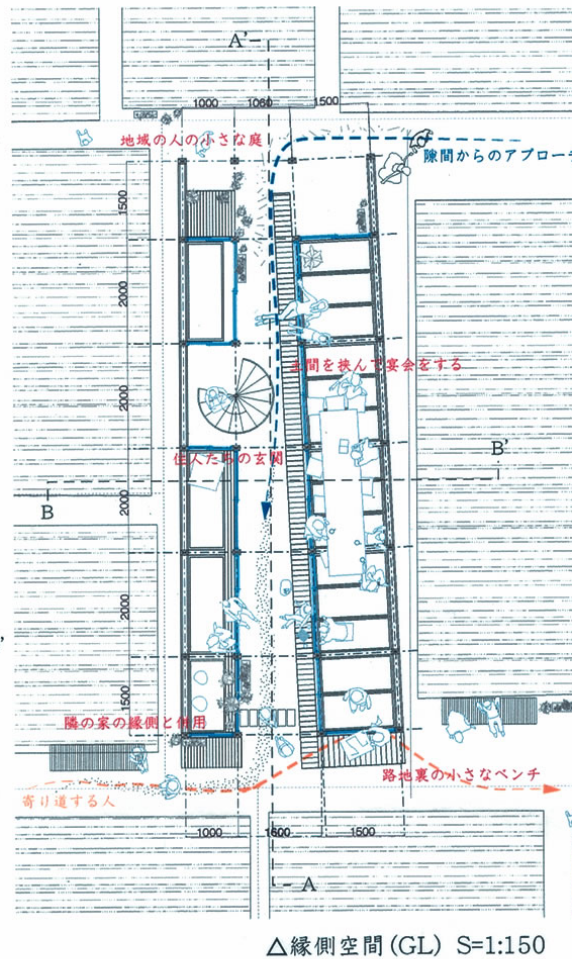
「呼吸していない建築」とは立面の空間が機能していない状態なのではないかと考えた。立面を構成する縁側、バルコニー、軒下、開口といった要素を生活動 から引き込むように家の内側へと延長していくことで私的隙間を建築内に創り出していく。住居内の生活の一部や賑わいが見え隠れすることによって、その場所独特な息吹を吹き込まれ、公的隙間から私的隙間への活動がグラデーション的に連続しながら、様々な人々のつながりのデザインをしていく。



△バルコニー(2F) S=1:200

△軒下空間(3F) S=1:200

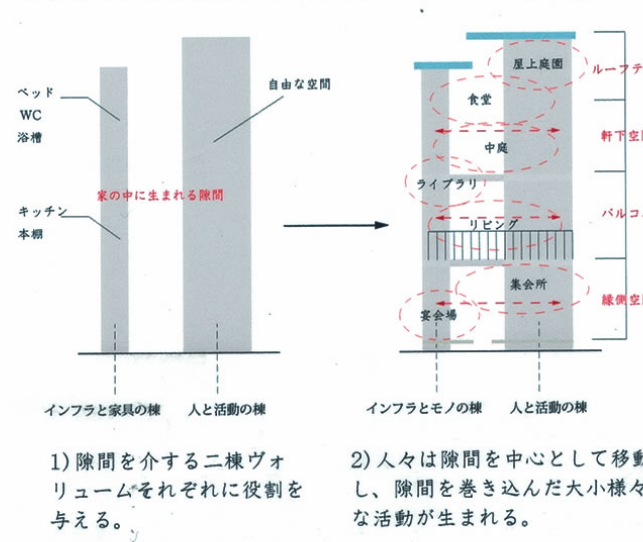
△屋上空間(RF) S=1:200



△縁側空間(GL) S=1:150

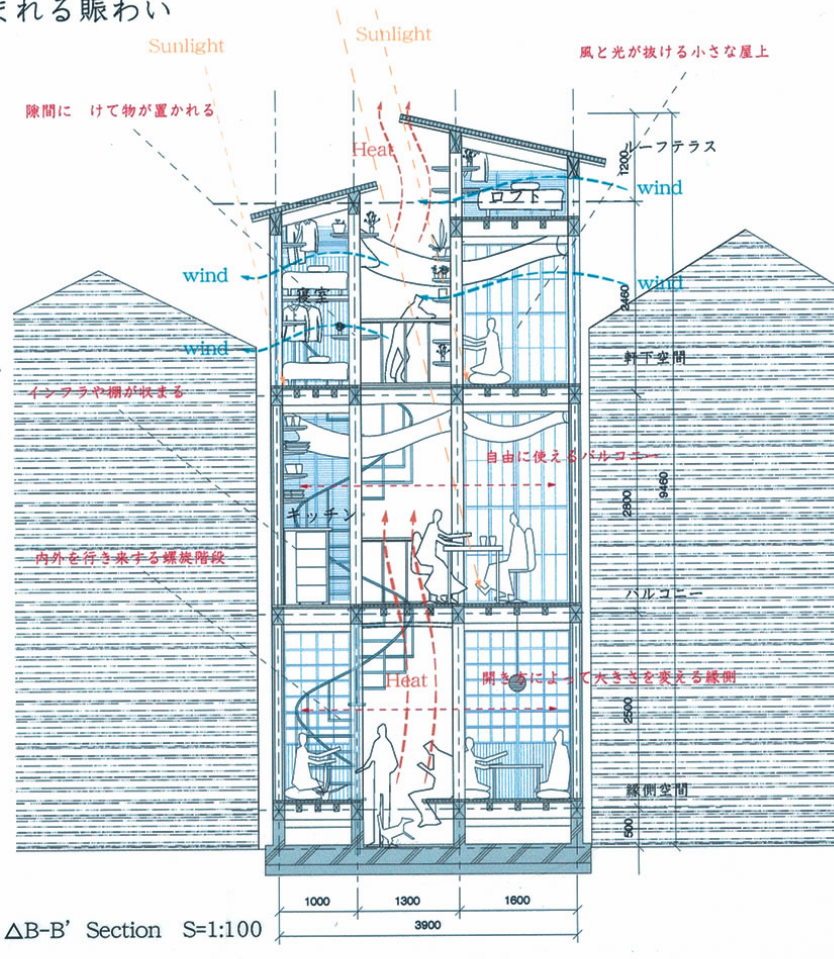
Diagram-2/Section Plan: 離すことで生まれる賑わい

家の中に生まれた隙間を介して建つ2棟のヴォリュームにプログラムを与えていく。一つ目はキッチンや風呂、トイレといったインフラや家に本来存在する様々なモノを内包する棟。二つ目は人の活動や滞在を内包するモノから解放された自由な空間。この両者の隙間を行き来するように人々が生活していくことで、隙間を囲んだ大小様々な活動が展開される。また可動式の建具を用いることで隙間に付随する空間の様相が刻々と変化していく。風や日光、熱といった環境の要素が隙間に絡まっていく。建築内から都市に至るまでそれぞれが関係性を持ちながら囲まれていくような「わたしの隙間」。

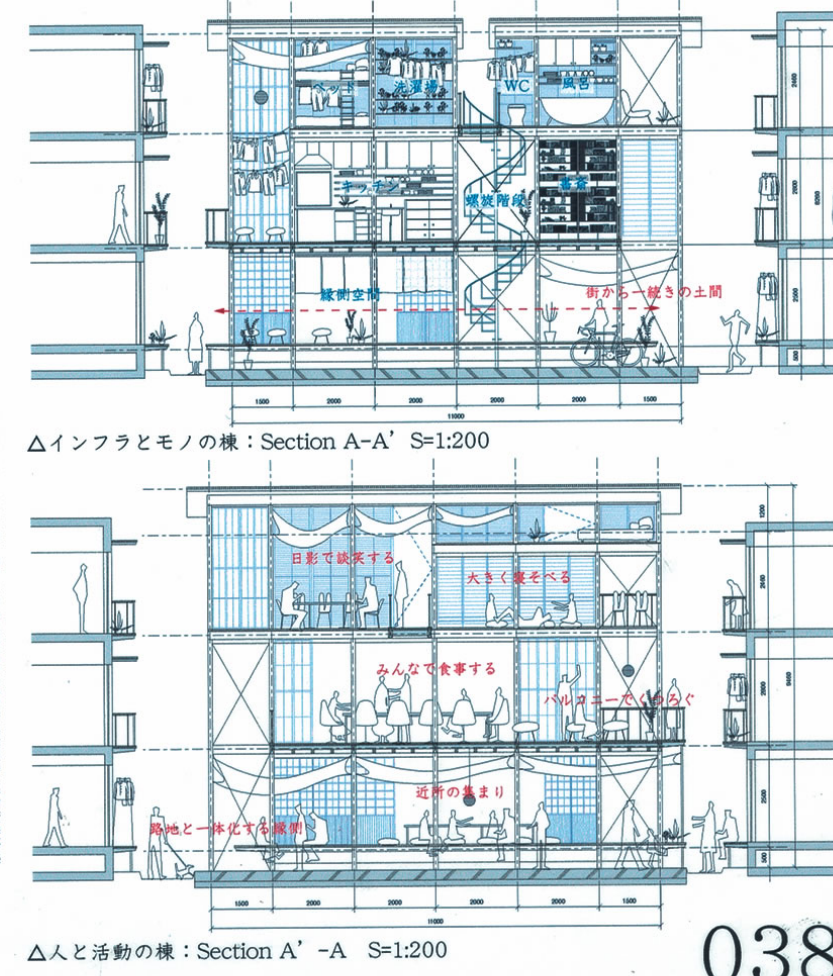


1) 隙間を介する二棟ヴォリュームそれぞれに役割を与える。

2) 人々は隙間を中心として移動し、隙間を巻き込んだ大小様々な活動が生まれる。



△B-B' Section S=1:100



△インフラとモノの棟: Section A-A' S=1:200

△人と活動の棟: Section A'-A S=1:200